『雁の草子』に見る物語草子制作の問題

坂口博規

（一）

『雁の草子』巻子一軸は、数多い室町時代物語草子の中でも天下の孤本と知られ、文芸史上でも唯一の趣向をとる珍重すべき稀書である。即ち、後見薄く頼りなき身の女房が石山寺の観音に詣で、そこで知り合った人間の男に変身した雁と交契し睦み合う後、その雁の死による哀別離苦の情断ち難く、発心入道して夫（雁）の後生を弔いつつ行いすまし、遂に往生素懐をとげた、という筋のうちに哀切とした情趣をもつ物語草子であり、所謂異類怪婚物語と称される作品である。

大正十五年秋、原物と同様に巻子の影印本が、藤井乙男博士の解説と校本注解の一書を合せて所蔵先の京都帝国大学図書館より出された。この藤井博士の解説に「その内容上より『雁の草子』と命名し云々」と見え、もともとの題名が不明なことを知る。室町時代物語草子と呼ぶ実に数百篇を数え、多種多様な素材と構想をとり混然とした相貌を示す作品群の中で、この『雁の草子』は従前よりあまり問題にされなかった。確かに他の物語草子と比較して趣向のみ奇異だが、文体的にも構想の上でも今一つ物足りないところがあり、それ故の結果と思われる。ただ私には少々心引かれる題材という点もあり、本稿で取り挙げたのである。

（二）

この草子の奥書に

落ち候べく候

慶長七年六月中旬書之

あさましやたれもかくこそありたく候へ

とあって、ここから藤井博士は原本を他から借用し一気に筆写したらしく語脱のことを相当気にしているようだと述べられ、原本の制作年代は「書写の慶長七年を去ること遠からぬ頃の作」と見ており、また「あさましやたれもかくこそありたく候へ」という書写し

た人物のこの物語草子への感想より

夫に別れて発心入道した女君の上に同情を寄せてゐる処を見ると、これでも慶長頃の読者には相当の興味を喚んだのであろうと考察されておられる。

物語草子は何らかの形で先行文芸の残照を留めているが、この『雁の草子』の場合に言及し得るのは、雁が詠まれた和歌の有する情趣の伝統がそのままこの物語草子に流入し、主題と関って色濃く哀切たる調子を伝えている点である。①

古市貞次博士はこの草子に触れ

雁は平安朝以来、最も文学の素材となった鳥であるといってよい。明月の頃、澄み切った秋空を、北国から都へと飛来する雁を詠じた古歌は無数に存したし、春の帰雁も亦、好んで歌はれ、愛誦すべき佳品が少くない。――中略――このやうな平安朝以来の文学者達に最も愛された雁を、古歌を参照しながら、擬人化しようといふ試みは、当然起ってよいはずであった。本書はそれである。

と述べられている。さてこの市古博士の雁の擬人化の問題を考える上で次の雁を詠む歌の発想伝統をみたい。

弁乳母

折しもあれいかに契りてかりがねの花の盛りにかへりそめけむ
（後拾遺・春上）

後京極摂政前太政大臣

今はとて山とび越ゆるかりがねのなみだ露けき花のうへかな
（新古今・春歌上）

法印覚寛

帰る雁越路の空のしら雲に都の花の面影やたつ（続千載・雑歌上）

寂蓮法師

花の色をよそに見捨て行く雁もおくるるつらは心あるらし（新拾遺・雑歌上）

正三位成国

なれて憂き後の別れを思へばや花よりさきに雁の行くらむ（同右）

等々の和歌は、雁の春帰る習性を「花との別れ」として詠むもので、この様な和歌の情趣がそのまま『雁の草子』制作上の基調となっている。藤井乙男博士は前記「雁の草子解説」の中で

物語の内容は極めて単簡平凡で、花を見捨てて都を去る旅雁の哀別離苦を擬人化したもので、……相手の女性――花の象徴とまでは見られない――とした点は、云々

と述べられているが、花と雁共々の擬人化による哀別離苦の物語とは言及出来ないまでも、今挙げた花との別れを詠む帰雁の歌にかよう情趣がこの物語草子の主題そのものと関って最も重要な発想契機となっていることが認められる。前記した藤井博士の見解に従うと、この作品の成立期が慶長七年を遠く去らぬ頃、即ち室町末期から安土・桃山時代と続く世は戦国乱世と騒然としている中で、不詳なる作者が殊更に古歌に哀調味あふれて登場する雁に変身の着想を与えて、花と雁共々の擬人化とは言及出来ないまでも一篇の男女の哀別離苦を主題とした愛情物語を創出した事情は謎である。

（三）

物語草子の作品群全体には必ずと言ってよい程先行文芸の趣向や修辞面の影響が窺われ、少しも文芸伝統から切り離した形で物語草子の研究は出来ないことは周知のことと思うが、『雁の草子』にも先行文芸の詞章や文辞の模倣・改竄が試みられている。特に和歌詠作上の慣用表現が適所に配され、平板な文体に好音調の表現がめだったりしており、この物語草子の作者の衒学趣味とも言える数養露呈が指摘出来る。またこの物語草子の享受者にとっても、そこに筋の感興を得ることもさりながら例えばある詞章や文辞に古歌や物語文芸・説話の先蹤を思い浮べる楽しさもあったであろう。この物語の雁が人間の男となり女性と交契し睦み合うという奇異な構想を支えていたものが、古来詠まれてきた雁を素材とした和歌の哀切とした情趣であり、そのことを知りつつ享受されてこそ作者の意図が充たされると考えてよかろう。これが室町期の当代流の物語文芸の制作と享受の実体ではなかっただろうか。

『雁の草子』の短い本文中より二、三作者の教養趣味を窺ってみよう。

〈これもあまのこにてやどもさだめ候はぬ、みやこもしり候はぬ〉

白描の第一絵中（内に六箇所の白描絵がある）の詞章で、石山寺で参籠する女房の前に現われた男が、都へ同行したいと述べる行である。この「あまのこにてやどもさだめぬ」という文辞は、地方から都見物に出てきた男主人公（名を越路兵衛佐秋春という）が都に知人もいないし泊まる所もないので「宿も定めぬ」と女房に都への同伴を求める言葉であり、「あまの子にて」とは単に慣用句として上に被せただけで、男があまの子であるという事ではない。

『新古今和歌集』巻十八の雑歌下に読人知らずの歌として

しら浪のよするなぎさによをつくすあまのこなれば宿もさだめず

とみえる（『和漢朗詠集』巻下、遊女部に同じ歌が「海人詠」としてみえる）。また『風葉和歌集』巻二十、雑三に

浪速わたりにて見あひける人の宿をとひ待りければよめる
あま人のむすめ

白浪の寄する汀に世をへつつ蜑のこなれば宿も定めず

の一首があり、ここからあま人のむすめを主人公とする擬古物語の存在が考えられている。ところで『宝物集』七巻本の巻五に

難波浦ノ海士（アマ）ノ子ハ。十六年ト云ニ。願力ニヨリテ。兼光少将ノ妻ト生レ相タリトコソ。海士子物語（アマノコノ）ニハ申タルゾ。願ノ志如是ノ事ニ侍ル故セ。無下ニ近クノ事ニハ侍ラズヤ。

とあり、ここに見る『海士子物語』が『風葉和歌集』より窺い知る擬古物語と同一のものか否かは分らぬが、難波の浦に住む海士（海人・蜑）の娘と都の公家の恋愛物語が想像される。清水泰氏は「あま物語に就いて」（国語国文八巻一号）において古写奈良絵本上下二冊の『あま物語』（天理図書館本）を紹介されている。これは主人公兼光が少将ではなく左近中将となっており、その本文中に「卑しき蜑の身にて宿も定め得ず」として

白波の寄する渚に世をすぐす蜑の子なれば宿も定めず

という歌があることを清水氏の稿より知る。

この奈良絵本『あま物語』上下二冊の成立は室町時代であり、同

時代のものとして『雁の草子』の作者が被読したか否かは勿論不明だが、「あまのこなればやどもさだめず」という言葉は、中世末の教養人たる作者は「白波の寄する渚に」の和歌を擬古物語との関りにおいて知っていたと考えてもよい。

〈さりながらひるなどはここにうちかたらひてもあらで、夜な夜なばかりぞかよひける、もしかづらきあたりにすむ人やらんと、世に心へずぞおぼへ侍りし〉

石山寺でめぐり逢った二人は都に帰って来て深い契りの仲となるが、男は夜ばかり訪れて来るので女はもしや葛城山に伝え聞く一言主神であろうか、と不安に思う行である。

葛城山の山の霊一言主神は容貌醜悪であることを恥じ夜間しか出歩かないという伝説があった。古代においては山はそれ自体神と考えられ、葛城山に隠りいます神として一言主神が信仰されたが、いつ頃からその一言主神は醜貌を恥じて昼間姿を見せぬという伝承が発生したかは不明である。この伝承を素材とした和歌があり、例えば『夫木和歌抄』巻十八冬部二の神楽に

葛城の神もあらはに見ゆるまで神楽の庭火あかくもあるかな　源仲頼
（永承五年十一月　俊綱家歌合神楽）

とあり、『後拾遺和歌集』巻四、秋上にも

八月十五日夜によちる　惟宗為経
いにしへの月かかりせば葛城の神はよるともちぎりざらまし

ともある。恐らく和歌詠作上の教養として、中世末まで伝説が伝説として信じられていたと思われ、『雁の草子』に適用されたといえるであろう。

〈我心にもあらち山ゆきあられにもさそはれたまはばくやしからじなどしたへど……〉

女主人公と契った男は春が近づくと故郷へ帰ると言い出し、また秋になってあなた（女）の心がかわらねば通って来るので待って欲しいと言うので、女は悲しくなり、行けるものならば一緒に男と行きたいものを、と嘆く行である。男（雁）が故郷（越国）に帰るその通り道（越路）にある有乳山（荒道山・愛発山）の雪や霞が私（女）を誘ってくれるものならば、という女主人公のしみじみとした悲哀・嘆きがここより伝ってくる。

有乳山は万葉時代から和歌の中で往々素材となった山である。越前敦賀郡と近江高島郡との間にある山で、その歌は冬歌に多く、「雪」「霰」と共に詠み込み、特に有乳山の近くの矢田野と合わせて詠まれている。『万葉集』巻十の「黄葉」に

八田の野の浅芽色づく愛発山峰の泡雪寒く降るらし

は有名な歌であったらしく、『新古今和歌集』巻六、冬歌に柿本人麿の作としてみえる。後代にも有乳山の雪・霰及び矢田野の歌は数多く見えるが、例えば

名所の百首の歌奉りけるに　前中納言定家
有乳山峯の木枯さきだてて雲の行らてに落つる白雪（新後拾遺巻六・冬歌）

雪の歌の中に　前大納言為家
矢田の野に打ち出て見れば山風の有乳の嶺は雪降りにけり（同

右）

等が見え、これまた和歌詠作上の代表的歌材として『雁の草子』への反映を考えたい。

〈としもくれはるのひかりまちえては、しづがかきねのむめまでもわふわふひらくる花のゑみをふくめるならひなるに……〉

春の風趣を詠むのに「賤が垣根の梅」は好んで詠まれた歌材であり、歌例をひくまでもあるまい。

こうして『雁の草子』の詞章や文辞を挙げて先蹤を求めるときりがなく、「くさのゆかりをたづねたまはば」「八月のいとくまなく千さとの外までも思ひやらるるばかり也（語脱あり）」あるいは「山田の庵」「鏡の影は今ぞ盛りと」「人は契りの朝顔」等々は、古来物語文芸等の詞章として見られ、又和歌詠作上の素材なり発想契機として往々歌に詠まれてきている。この外に先行文芸の『雁の草子』への反映をみると、例えば「花色衣の移ろう方のをはせずば」とは

花の色は移りにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

（古今巻二・春歌下）

を、「むばたまの夜のころもをかへしつつ」とは

いとせめて恋しき時はむば玉のよるの衣をかへしてぞぬる（同巻十二・恋歌二）

を、また「さらぬだにうきくさのさそふ水あらばやとおもふ身なれば」とは

わびぬれば身を浮草の根を絶へてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ（古今巻十八・雑歌下）

という具合に、小野小町の代表的な和歌を参照し改竄した詞章が適所に配されている。

特にこの『雁の草子』の成立に大きな契機となったと言うべき漢土の蘇武雁信説話が本文中に叙述されている（特に日本の蘇武談で問題となるのは胡国に被虜された蘇武が片足を切られ野に放されたという契機である。本草子の蘇武談もこの契機をもつ）。その契機としての重要さは前後の詞章からも窺われ、即ち

あやしかりつる我身の契りつくづくと思ひ続くるに唐土にもかかるためしあり。――（蘇武雁信説話）――まことにつばさの中には雁金は心ありける故にやはかなき契り馴れ結びけむ。

とあって、単に古歌に詠まれ歌人に愛された雁を擬人化したというだけでは物語創出の理由は説明不足であり、「雁は心ある鳥」という発想契機の意義を認めない限り、この物語草子の成立の秘密は解き明かせないのである。

こうして見てくると『雁の草子』を制作する作者の意図とは、古来雁を素材とした和歌の、清澄なもののあはれを感ぜしめるしみじみとした哀愁味をそのまま物語に持ち込もうとしたと同時に、先行文芸（特に古歌）を参照しその文芸伝統を如何に自らのものとして工夫し改竄するかにあったとも言える。一教養人の私的なすさびとしての物語草子と言っても過言ではないだろう。

この物語草子に留意すべきは、薄幸の女性がやっとつかんだ幸福も、実は真実の愛を傾けてくれる男が雁の変身したものであり、そのあさましい我身の前世からの宿執をなげきながらも男を愛する心は一層深くなるばかりで、男の死に際して出家しその後生を弔うべ

く男の故郷である越路のとある山田に庵を結び、仏道修行怠らず往生素懐を遂げたという、一女性の愛情物語めかしている点である。

主人公は堀川辺に住んでいたある官位の低い公家（生上達部）の娘で、宮中に仕える女房であるが、両親が都を離れ草深い里に引き籠る。「数にもあらぬ世に住み侍り」とあるから、父は官職を離れたのかもしれぬ。それで一層後見の薄い憂い宮廷生活を送る。また真実の愛情を捧げてくれる男性もいない。物思いがますます積り、ある日石山の観音に愁訴歎願しようと思いたち寺に籠り

我身に頼む筋なくば一筋にこの世の夢に迷はずして後の世を願う心をつけ給へ

と祈る。憂き世に動揺しない心だけでも欲しいと願う薄幸の女性の祈りは哀れである。

この女房の前に現れたのが雁の変身した名を越路兵衛佐秋春という都上りしてきた田舎人（古代に、雁は常世から渡ると詠作されたが、中世になるに従って雁は越路から渡り越路へ帰るという和歌が瀬出し固定する）で、狩装束も打寝れ、また馴れ馴れしく言い寄ってくるこの男は、宮仕えする女主人公にとってまったく未知の世界の人間であった。

二人は都へ戻って契りを交す仲となる。女主人公はひたすら石山観音の利生と喜び、里文字（私宅）に籠り宮仕えも怠たり果て一心に愛情を捧げる。

例えば、男は田舎人らしく訪れる度に土産として米を殊繁く持ってくる。女房はその行為を滑稽に思うが、男は多分微縁な身の上であろうと思えばこそ決して軽蔑すまいと心に誓ったり、また男との睦まじい語らいに幸福な日々を過ごすうちにも年が改まり春が訪れると、男の様子が何か落着かず、もしや他の女性に心を移したのだろうかと不安になるが、そのように男に不信感を抱く自分を諫めようと努めるという具合にである。

契った男が雁の変身したものであることを知った時、女はこの浅ましい雁との契りも、自分の薄幸な身の上を石山の観音が哀れんで結び合わせてくれたものであり、前世からの宿執であればこそ、男との睦まじい幸福な日々を大事にもし、別れに「一旦故郷に帰るが心変りがなければまた秋に必ず訪れる」と誓った男の言葉を信じ、慕う心は少しも消えることはなかった。そしてその男（雁）が故郷への帰途狩人の弓矢に射殺されたことを書いた手紙（夢の中で雁が枕元に手紙を届けるのを見て驚いて目覚めると現実であった）に、再び秋訪れようという願いも長い夢となったとして

志し変らずば、一仏浄土の縁を願ひ、様を変へて、我後世を助け給へ

という男の願い通り、女房は乳母を誘って尼となりひたすら男の後世を弔いつつ往生素懐を遂げたのである。以上が本草子の骨子である。

こうして見ると作者の作為は、一人の薄幸の女性がたとえ契った相手が雁であっても、真実の熱情を捧げ貫いた物語を構想したところにある。石山寺の観音に愁訴歎願して

一筋にこの世の夢に迷はずして後の世を願う心をつけ給へ

という女主人公の祈りとは、神仏に誓願して実人生の営みの上で克服し得ぬ負の清算をはかることであり、「後の世を願う心」とは内

界上での自律的な生を体現化しようという意志として把握することも出来るだろうが、[2]言わば自己の迷妄の途より救われんがため神仏に誓願するという女性は往々古典作品に描かれてきたし、また実際にその様にしてしか救われなかったであろう古えの女性を我々はここに見けだるでよい。この物語草子からこの草子成立期の女性の問題を考えることなど到底出来ないし、それはこの物語草子を制作する作者の姿勢からも当然のことである。他の物語草子に登場する「わわしい女たち」[3]とは断然違った女性であり、せいぜい王朝期の文芸に描かれている恋にたゆたふ女性ではないということだけを見れば充分と言っても過言でない。

『雁の草子』の作者が如何なる人物か一切不明である。先行文芸（特に和歌）に造詣の深い教養人なら誰でも制作出来そうな物語草子である。作品の傾向から新興民衆の進取気風は窺われぬ。文芸伝統への回帰などと切実な意味合いで考えると、些か短絡的との誹りも免れないが、伝統的な階級意識に固執する旧貴族文化圏の一人を作者と考えてみたいと思っている。

『雁の草子』制作の秘密めいた作者の創作衝動をメンタルな文芸伝統への傾斜という視点で考察する時、何かしら切実な作者の文芸営為の位置（シチュエーション）を考えたくなってくる訳だが、少々せんさくし過ぎるだろう。依然作者も、その作品の着想の秘密も謎である。単に室町時代末期の一教養人が、古来文芸の世界で愛された雁を擬人化しようという試みにより制作された物語草子、という程度にとどめておく方が無難だろう。

（四）

鼓常良氏は『室町時代物語草子（氏はお伽草子と総称する）について、室町時代の物語文芸の特殊事情を包括する時代様式の名称と見るべきであるとしている。[4]文芸は史的変遷を遂げる。室町時代物語草子は当然史的現象たる変遷の相を示す作品群である。鼓氏の時代様式の名との指摘は支持されるべきで、ここに大雑把ながら物語――擬古物語――物語草子（御伽草子とも近古小説とも中世小説とも総称される）という作り物語の文芸の様式史を展望し得るし、三谷栄一博士の『物語文学史論』に見る、物語の崩壊の諸相より物語草子の文芸的特質に言及された示唆多い考察[5]が今もって重要となってくるのである。

前述もしたが、物語草子の殆ど全ての作品には何らかの形で先行文芸の影響を見る。単に文辞上の共通というだけでなく、先行文芸の模倣・改作という構想上にまで及び、わずかな詞章の先蹤を先行の物語・古歌に求めることが出来る。こうした傾向を、言わば文芸制作意欲の、あるいはその能力の低下した室町時代の所産と考えねばならぬ。そして文芸の衰えた、制作能力の低下した時代の文芸人について考えねばならぬだろう。

西岡虎之助氏の『民衆生活史研究』に「国史学における民衆文化要素の重要性」と題する序説があり、そこで西岡氏は貴族文化と民衆文化は対蹠関係にあるもので、時間の経過にともなって生ずるそれぞれの発展にあっても永遠に平行関係を保ちつつ前進し、両文化が互いの要素を摂取し合いながらも結局のところ主要部分では融合しないと述べ、

しかも前進すればするほど、貴族文化と民衆文化との本質的な開きが大きくなるのである。その開きが大きくなるということは、民衆の文化の内容がますます充実化していくのに反して、貴族文化の内容はいよいよ空疎になっていくことである（貴族文化と民衆文化の関係p6）

として、その結果空疎化し切った貴族文化と充実化し切った民衆文化が地位を交代し、「国史上における大変動」とはおおむねこれを指すと述べておられる。

西岡氏の所見に従うと、物語草子は対蹠関係にある貴族文化と民衆文化が平行状態のまま一方で崩壊し一方で興隆するという流動的な文化抗争の時代の、それも民衆文化の方がその地位を高めつつある情勢を背景として生成発展する文芸であり、まずは多種多様な素材と構想をとり混然とした相貌を示す作品群となり得た理由を解き明かす糸口をここに求めることも可能であろう。何よりも二つの文化要素を結果として同時に呑み込んだ文芸が物語草子であり、その作品群全体が前代よりの物語文芸の史的変遷を受けた時代様式であり、そのしんがりの位置を明確に求めておかねばなるまい。物語草子なる作品群の論として、その史的現象の相たる貴族文化の空疎化し低落化する文化要素の言わば崩壊の相と、物語文芸に新世面を与えた民衆文化の言わば興隆の相を同等の資格の上で文芸史上の論として帰納してゆかねばならぬだろう。

物語草子に様式（スタイル）の問題から考察を与えた佐々木八郎博士の『語り物の系譜』に見る作品群の二大別の論は、今見た西岡氏の所見を通して考えると確かに重要な視座を与えてくれる。佐々木博士は第一類の様式を平安時代以来の散文小説の系統を承け、その表現においても大方それを踏襲した純然たる物語であり、第二類は在来の小説的な表現のあり方の中に語り物的表現が摂取されたもので、近古小説の発生から言えば第二次的の新しいものと述べられている。[6] 後次的な発生とする第二類の様式について考えてみると、例えば唱導文芸と呼ぶ『神道集』に原拠をもとめたといわれる[7]『青葉笛物語』や『熊野の本地』（書冊の文芸として成熟する過程で語り物様式が消尽したと見る『五衰殿』も含めて）等に見る所謂「草子の聖典化」の傾向を、唱導という営為の保持するエロキューションがそのまま書冊の文芸の中に流入したものと把握出来るだろう。こうしたところにみる訓蒙化の志向が、唱導文芸あるいは語り物文芸とまったく無関係に成立したと見る他の物語草子にまで及んで、例えば神仏の霊験を主軸に叙述された物語草子等は「よくよくこの草子を聞きたまへ」という慣用技法たる形式的口調で物語をしめくくり、そうした所謂「めでたい」物語の例を我々は多く見るはずである。そしてこうした物語草子の聖典化の傾向は、前代よりの物語文芸そのものが内包した発想契機ではなく、そして語り物文芸を享受し発展させたものが、決して旧貴族層ではなく民衆層に本質的に求められる時、佐々木博士の述べられる如き近古小説の発生の上では後次的なものとし、又西岡氏の所見に求められる「国史の大変動」の図式に即して考察可能な作品群の論の方向性をここで確かめてみたいのである。

本稿で取り挙げた『雁の草子』の文芸としての位置を求める時に問題となるのは佐々木博士の求められた物語草子の第一類の系譜で

あり、語り物の後次的な作品群の様式意志決定とは無関係な、本来的な物語文芸の史的変遷のしんがりの意味を考えたいのである。

物語草子が先行の物語文芸に比べて価値を低落させているのは、それを制作し享受したそれまで担い手の第一人者と自認し得た階級意識の形骸化と無縁ではあるまい。またそうしたところにステロタイプ化した表現性の問題も考えてゆかねばならぬのである。無気力・怠惰のうちに[8]文芸を制作し享受することは、模倣・改作や修辞面の換骨奪胎の妙を得て、先行文芸を当世風に享受する方法を模索していたことである。

前に『雁の草子』と先行文芸の関係を瞥見した。今一つ、三谷栄一博士の『日本文学の民俗学的研究』で引見されている[9]例だが、『源氏物語』の当世風の享受の実体を見てみよう。

物語草子の一つ『鳥辺山物語』の初めの方に初春の叙景が記されているが、その

その事となく月日を送りける程に、年も返りぬ。空の気色名残なくうららかに、雪まの草も青み出でて、おのづから人の心もの びらかに、まいて玉をしける御かたがたは、庭より初め見所多く、みがきましぬる有様、まねびたてむも言の葉足るまじくなむ

という一節が、『源氏物語』初音の巻の冒頭に見える、即ち

年たちかへるあしたの空の気色、なごりなく曇らぬうら、かげさには、数ならぬ垣根のうちだに、雪間の草、若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきだつ霞に木の芽もうちけぶり、おのづから、人の心ものびらかにぞ見ゆるかし。ましていとゞ、玉をしける御前は、庭よりはじめ見どころ多く、みがきまし給へる御方々の有様、まねびたてむも、言の葉足るまじくなむ

を流用したものであることを知る。

『鳥辺山物語』の制作者の側で言えば、『源氏物語』の初音の巻の冒頭を読み且つ教養として保持していなければ、当然のことながら叙述することは出来ないし、また模倣表現を試みる作者の楽しみもないことになる。物語草子を叙述しながら先行文芸の一節を流用することに、一種の衒学趣味とも言える自負心のくすぐりがあったはずである（と見る）。そして享受者の側で言えば、一篇の『鳥辺山物語』を読みながら、そこに『源氏物語』の初音の巻の一節を想起する楽しさがあったのではないか。『源氏物語』の初音の巻を数養として知らなければ、そういった模倣表現の面白さを感じ得なかったに相違ない。

これが言わば物語文芸の末期的症状であり、創作力の失せた時代の物語の当世風の制作と享受の実体であったろう。結局行きつくところは見えている。類型が類型をよんで行き詰るにきまっている。ところが都合良く、台頭し地位を高めた民衆の側で、この物語文芸の世界を引き継いでくれる。しかしそれは決っして伝統文化たる散文小説の系譜に立って物語文芸を引き継いだ訳ではない。前記した如き佐々木博士の語り物様式の散文小説的在り方への混入の本質的問題をここにおいて考えてゆかねばならぬだろう。神田秀夫氏は古典文芸の伝統を第一次形成（七ー十二世紀）交換期（十三、四世紀）第二次形成（十四ー十九世紀）と把握し、第一次形成に対して第二次形成を反措定（アンチテーゼ）と見て

西鶴を頂点とするお伽草子以来の系列は源氏物語を頂点とする歌物語の系列に対する反措定だと思う[10]

とされている。あるいは前記した西岡虎之助氏の所見に見る「国史の大変動」の本質的なところを看破されてのものかもしれぬが、この点については、別の機会に考えてみたいと思っている。

（五）

更に物語草子の多くの作品を取り挙げ、帰納的に作品群の論を導きたいと思っていたし、用意していたいくつかの物語草子もあったが何ら触れ得ず、また室町時代史と具体的に関りを持たずして表面的で抽象的な記述しか出来ず、結局以上の体たらくである。

さて『雁の草子』だが、瓦は如何様に磨いても瓦であるとまでは言いたくないが、確かに他の物語草子と比較して高い評価は与えられない。ただ作り物語の史的現象として最も典型的な好例である。そして現在にまで天下の孤本としてでも良くまあ残ったと驚嘆する方が真実なのだ。この手の草子は恐らく前に述べたような当世風の制作の上で数多くあっただろう。他のものは消え『雁の草子』は残ったという程度でこの作品を把握しておけばよいと思う。

補注

①『中世紀小説の研究』第六章「異類小説」、2「怪婚談」三五五頁

②亀井勝一郎著、日本人の精神史研究『中世の生死と宗教観』の「乱世に直面して」にも、小林秀雄氏の「無常という事」の冒頭にも引かれているが、例の『一言芳談抄』巻之下の「比叡の御社に、偽りて巫の真似したる生女房」の狂気のふるまいとその「とてもかくても候。なうなう」という言葉が念頭に浮ぶ。夜深けて人の寝しづまった頃に女の打つ「ていとうていとう」という鼓の音が私の耳の底に響いて消えない。「その女の心を」と強いて問われたある人が「生死無常の有様を思ふに、この世のことは、とてもかくても候。なう、後世を助け給へと申すなり」と解したとあるが、その言葉を我々は熟慮しなければなるまい。「後世」を「助け」てほしいということを来世救済を願うとばかり思ってはならず、結局のところ主体的な生の確立という、今現在生きている己れの救われることを願うのであり、そこに中世の〝狂〟の本質を考えねばならぬのだ。「とてもかくても候」を決して厭世の意味で受け取ることは出来ないだろう。そこに現世に救いの術を求めて身もだえする生女房の姿を見ればよい。作り物語の文芸よりはこうした説話集の中より、我々は中世の時代精神を考察してゆくはずである。

③もろさわようこ著、『わわしい女たち』。狂言、御伽草子にみる庶民像としての女性を「わわしい女達」と見て、庶民のバイタリティをささえた女の原像を導いている。

④『文芸学の方法』第三篇「総合的観点」の第十一章「ジャンル」四一四頁。室町時代物語草子の作品群をジャンルと総括することは、そのあまりに混然とした相貌を示すが故に困難であり、鼓氏は「あるいは時代様式が生んだ変態ジャンルとでも見るべきだろう」と述べている。

⑤『物語文学史論』、第三章「物語の崩壊」
⑥『語り物の系譜』、八「説経」一五八・九頁。
⑦菊地良一著『中世の唱導文芸』、第二篇「中世唱導の説話と教説」第一章「中世唱導の特質」四五・六頁に、『神道集』と物語草子の関係を一覧したものが見える。
⑧無気力・怠惰ということは、時代や社会の現実に挑むような意欲をもって臨み、実人生と文芸とに関りをもたないということである。現実から何かを汲みとろうという意欲のない、あるいは現実に目をつぶったところの無難な構想をとった物語草子は当然のことながら、文芸的に低調さを免れない。御崇光院は『看聞御記』において、狂言の内容の公家を「疲労」させることに憤り、「尾籠之至也」と怒ったこと（応永卅一・三・十一）も決っして室町時代の階級意識として物語草子制作の衝動にまでは及ばない。『鶴の草子』や『秋月物語』の欺瞞的で空疎な内容の本質を、「没落貴族の見果てぬ夢」（杉浦明平氏、文学・第三十二巻第七号）と考える文芸の論をここで確かめておきたい。
⑨『日本文学の民俗学的研究』、第二篇「口承文芸の伝承形式とその性格」第二章「物語る日と文芸の発生」四一二・三頁
⑩『古典一周』（上・下）の上巻、Ⅰ「疑問から仮設へ」の「二つの古典文芸」四八頁。

（文学部助手）

（64頁よりつづく）
（注①）森本治吉氏「万葉集巻七考」（国語と国文学四巻八号）
（注②）品田太吉氏「万葉集七之巻考」（アララギ第十四巻第八号）
（注①）も参照
（注③）久松潜一氏（代表）編『新版日本文学史』至文堂森本治吉氏「私歌集を中心とする方法」三四〇ページ
（注④）武田祐吉著「万葉集全註釈」六、三六七ページ
（注⑤）沢瀉久孝著「万葉集注釈」巻第七、一五一・一五三・四ページ
（注⑥）（注②）参照
（注⑦）（注①）参照
（注⑧）万葉集巻十八四〇五五の次の左注四〇四三の次の左注四〇五一の次の左注
（注⑨）（注①）参照
（注⑩）（注④）の三九三ページ
（注⑪）（注①）参照

（駒沢大学高校教諭）